

森羅万象いきとしけるもの

野元正

森林は太古から生き物たちの棲家だった  
荒ぶる神も穏やかな神も賑やかな神も

ひそやかな神も鬼神も疫病神も

海神 風神 雷神 産土神うぶすなのみ 地神じがみ

魍やまのみみ 森林の神 大樹の神 瘟鬼おんき……

森林の真ん中に光の御柱を立てて

周囲を神神の磐座で囲んだ

御柱の頂いただきは雲の間にまに霞む

陽の後光——天空に通じる神神のきざし

八百万の神神が集い踊り宿る依り代

樹樹をふるわす風や神鳴りは 神神の声

大なる 津波 野分 洪水 山燃え

絶後の寒暖 そして疫病

神神の怒りと戒め

今 森羅万象に宿る神神

みな荒ぶる神になってしまったのか

悪口 批難 中傷 口撃 風評 邪推 いじめ

愛憎 戦争——そして得たいの知れない疫病

かつて 神神は 森羅万象に宿り

歓喜の歌を詠っていた

魂は 宇宙を永遠に彷徨って

地球を振り返る

そこからは何千年前の地球が見える

赤い瀕死の地球でなく

紛れもなく汚れない

紺碧い地球号が飛翔していた

八百万の神神が

森羅万象を依り代に

自然とともに

歌を詠っていた